

# 大阪市とその周辺農村における 輸出雑貨工業の地域的展開

—明治期～大正期—

山 中 進

## はじめに

1877年（明治10）ころの東京・大阪には、外国商品の激しい流入とともに、それらを模造生産する洋品雑貨工業がすでに生まれつつあった。

東京商法会議所が1879年（明治12）6月、大蔵省関税局の輸入商品の国内流通状況に関する諮問に対し、輸入品を模造し「営業タルヲ得ル」商品として、各種釦鈕、馬車並馬具、机並椅子、木綿繻絆股引、足袋、麦酒、摺付木、洋紙、靴類、石鹼、草細工物、傘、傘骨、帽子、紙巻烟草、襟飾、ステッキ、石盤、石筆、写真<sup>1)</sup>、活字、煉瓦石、フランネルの23種をあげている。

これらのいくつかは今日、都市の機能と密接に結びつき、量的にも質的にも都市の構成要素として、また工業構造のうえからも重要な地位を占めており、都市工業の本質を考えるうえで<sup>2)</sup>欠くことのできない存在となっている。しかしこれら工業は、発生的に東京と大阪とでかなり様相を異にしていた。板倉勝高氏は、東京は都市起源のものが大部分であるのに対し、大阪では農村の農閑余業に依存して発生し、それが核となって発展をみせたものと、都心部の商業的機能に付属して発生し、次第に外縁的な発展をしつつ地域形成がおこなわれたものと、2通りの発展過程をもつものが複合して存在していることを指摘している<sup>3)</sup>。だが、筆者が以前に明治・大正期の中河内農村における農家副業についての検討をおこなったが<sup>4)</sup>、この限りではこのいずれもが当初、農家余業として農村の労働力と深くかかわったものであったと考えており、

その意味では大阪の場合、上述した工業のいくつかは都市の工業であると同時に、農村における工業としても存在したといえる。これをきわめて大阪的のといってしまえばそれまでだが、都市と農村の工業を、あるいは工業を介した都市・農村関係を考える場合、この地域の工業のあり方の検討は、きわめて興味ある課題といえよう。

そこで、本稿ではこれまでの研究とのかかわりから、明治期から大正期にかけて大阪の代表的な輸出雑貨工業であったブラシ、貝ボタン、マッチをとりあげ、これら工業が大阪市とその周辺農村でどう展開したかを検討し、大阪における工業地域形成の特徴の一端を把握したいと考えた。

これまで近代大阪の工業については、工業の構造やその産業的特質<sup>5), 6)</sup>、それに経済史学の立場からの発達史にかかわる論著が多く、いずれも工業そのものに重きをおく内容である。地理学からは工業構成<sup>7), 8)</sup>や分布論的な考察<sup>9), 10)</sup>がおこなわれているものの、概してまだ工業と地域とのかかわりについて十分に言及されてきたとはいえない。

## I 農家副業の生成とその地域的特徴

### 1) 明治期の農家副業

大阪の雑貨工業の多くは、はじめに述べたようにその成立において農閑余業に依存していたわけであり、それが具体的にどのような状況であったのか、まずこの点について述べることにする。

『農事調査（大阪府之部）』（復刻版、第3・

4分冊)には、1888年(明治21)ころの「餘業ノ種類」と「餘業ノ興廢」状況が、旧郡ごとに記載され、主なものについては、それに従事する者の概数と男女別内訳も記されている。そこで旧郡すべてについてその内容をみれば、数こそ少ないが大阪市の雑貨工業と結びついた余業が散見する。東成郡の碁石製造、眼鏡磨、豊島郡のマッチ箱張、渋川郡の眼鏡製造などである。

マッチ箱張は、「婦女子農耕炊爨ノ餘暇及夜間之ヲ営」(第3分冊, 144頁)んでおり、マッチ工業の勃興とともに、マッチ小箱にラベルを貼る手仕事などが、周辺農村の婦女子の安価な労働力を求めて進出している。眼鏡製造は、「分業ノ法ヲ行ヒ玉ヲ製スルモノト縁金ヲ製スルモノトニ區別ス前者ハ大阪ヨリ硝子ヲ買入レ踏機械ハ砥石等ニテ磨キ後者モ亦大阪ヨリ銅條ヲ買ヒ来リ薬品ヲ以テ巧ニ鍍金ヲナシ之ヲ大阪ニ売」(第4分冊, 162頁)し、ここではレンズと眼鏡縁製造がおこなわれており、男子ばかり約300人が従事していた。東成郡の眼鏡磨についての説明は何もないが、これはレンズ磨きのことであり男子28人、女子135人が従事している。

東成郡の眼鏡レンズは1831年(天保2)に生野村(現大阪市生野区)で製造が始まったといわれ、とくに田島地区に集中する。1907年(明治40)には産業組合法による組合も結成され、このとき82名の眼鏡製造者を数えたが、大正期には従業者の数も350人に増加し顕著な発展をみている。碁石は宝暦年間(1751~1764)に、小路村片江の百姓が大阪の碁石問屋(東区平野町)より技術を習得し、その賃仕事をおこなうようになったのが始まりといわれている。これらに共通することは、いずれも原料・販路の面で大阪の間屋に従属し、また集団で産地を形成していることである。

以上のように1888年ころの大阪周辺農村には、種類こそ少ないが雑貨工業と関連をもったいくつかの農家副業が存在していた。次にこれらを含め、その後の農家副業の生成・発達について大正期を中心に述べることにする。

## 2) 大正期の農家副業とその地域的特徴

この時期の農家副業の地域的な展開を把握するために図1を作成した。この図は都市および農村の工業と関連をもった農家副業の所在する町村の分布を示したものである。図示した副業は、当時20町村以上にわたって存在したものと、旧郡内において5町村以上にわたってみられたものをとりあげている。それは副業の性質によって比較的広範囲でおこなわれるものもあれば、限られた地域に集中しているものもあり、こうした副業の存在形態を考慮したからである。ただし、本図とこれにかかわる内容はすでに公表したものであるが、大阪周辺農村の変容を比較論的に考察していくうえで、また本節と後の章との関連を考えて、あえて再掲・再述したことをお断りしておく。

さてこれによると、レンガ・瓦製造のほかは主として農村の織物業に関連したものと、大阪市を中心に発達した雑貨工業と関連した副業が存在する。前者では賃稼ぎを主とした木綿織が広くおこなわれているが、メリヤスは中河内北部から北河内にかけて、またタオルは中河内の北部農村と和泉の南部農村で多くみられる。段通やこれと関連したゴロス糸捌ぎ、糸継ぎなどの賃仕事は堺市周辺の泉北農村から一部南河内にわたっておこなわれている。しかし後者のブラシ毛植、貝ボタン、マッチ箱張などは、中河内・南河内の農村を中心に卓越している。ブラシ毛植は中河内から北河内の一部にかけて広くおこなわれていたし、貝ボタンは南河内でも旧志紀郡を中心とした地域にまとまって分布する。マッチ箱張は中河内から南河内にかけての農村に認められる。

こうしてみると、とくに中河内を中心とした河内農村には、大阪の雑貨工業の発達と深くかかわる副業があり、大阪市域のみならず、河内農村においてもこうした工業の成立・発展があったことを示唆している。中河内には1893年(明治26)にマッチ工場の昌盛組(職工300人)が竜華村に進出している。また同じ年に盛業合資会社が意岐部村荒本で、大阪上町付近の町工

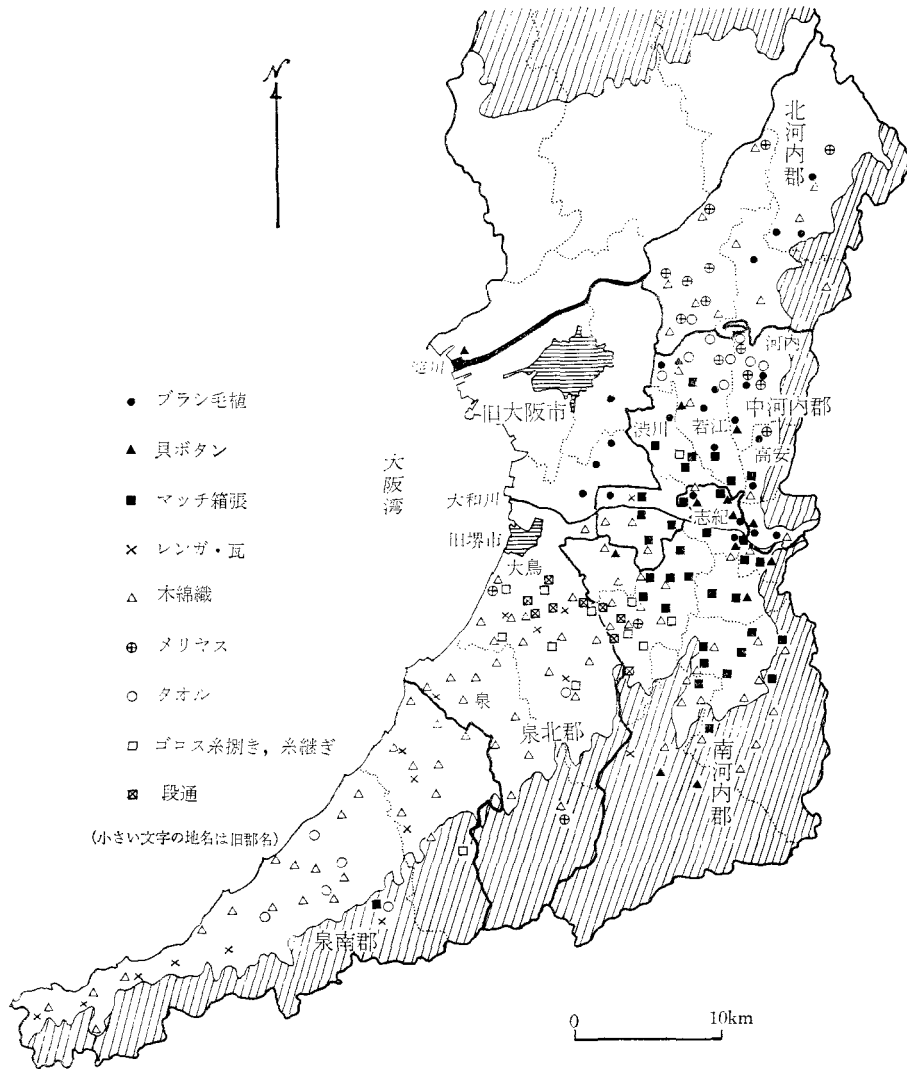


図1 大阪府における農家副業（工業関連）の分布（1915年）  
 (資料) 大阪府内務部（1915）：『農家副業成績品展覧会報告』65～83より作成。

場も八尾町においてブラシ毛植の技術指導をおこなっている<sup>15)</sup>。この2年後には、大阪市西区にあった正垣貝鉦製造所が、柏原・弓削両村に進出しており、1897年（明治30）に両工場を統合して柏原村今町に移転し、繰生地・穴孔<sup>16)</sup>・台紙付などの部門が副業として定着している。こうしたことから大阪市で発達した雑貨工業が、当初農家余業に依存して周辺農村に進出する時期

は、明治20年代（1888～1897）後半のことであった。

工業進出の背景については、すでに論じたことでもあり詳述を避けるが、綿作・綿業衰退後の農村余剰労働力に指向したことは否めない。とくに河内農村ではこの時期、滞留する農村労働力が地域外へ流出しにくいすむ条件、つまり都市の工業と関連した新たな副業の生成をみて

いる。これを都市の側からいうならば、大阪市  
の工業が周辺農村の工業形成を徐々に方向づけ  
ていった状況を、こうした副業分布のうえから  
うかがい知ることができる。なお、図1には  
1888ころ大阪の商業機能と緊密な関係にあっ  
た眼鏡や碁石製造などの副業はみられない。こ

れらは大正期に消滅したわけではなく、特定の  
地域に集団で産地を形成している。このことは  
表1をみれば明らかであり、昭和初期に至って  
は眼鏡製造、金網、針金、洋傘柄などは「自家  
企業ノ部」として扱われ、農家副業の域を脱し  
て大阪周辺農村における零細な工業として成立

表1 大阪府における農家副業一覧(1915年)

郡名	農家副業(工業・労働の部類に属するもの)
西成	(C)貝釦 (D)貿易雑貨品 <u>メリヤス針</u> 真綿摘 毛糸網 ミシン裁縫
東成	(A)歯刷子毛植 <u>マッチ箱張</u> 撚糸 タオル 袋張 (B)眼鏡製造 下駄表製造 (D)碁石 石鹼製造 <u>硝子製造</u> <u>メリヤス製造</u> 硝子玉切り 紡績職工 真綿摘み 鼻緒 土工 手伝 日雇稼 青物行商 川砂運搬 尿尿売買
三島	(A)苧縄製造 三ツ組麻苧 (B)瓦製造 (C)寒天製造 (D) <u>メリヤス製造</u> 笊・畳表製造 真綿延し 線香粉 シデ紐製造 鹿皮製造 製粉業 精米売買業 <u>貿易提灯</u> 農産物行商 日雇 車夫
豊能	(A)麻縄製造 三ツ組麻苧 (C)寒天製造 (D) <u>メリヤス製造</u> 凍豆腐 酒・醬油製造 竹細工 植木造庭 日稼業
泉北	(B)麻段通 段通 竹籠 瓦 (C)金網 (D) <u>メリヤス</u> 綿ネル 白木綿 織物製造 麻真田製造 マニラ真田紐 肩掛房製造 ゴロス糸捌き 木綿晒 紅染 手拭染 履物表 提灯側製造 指物 止針 竹細工 木管 傘 轆轤 天笠 <u>玻璃玉製造</u> 甲馳製造 紡績職工 植木職 手伝職 日稼業 砂糖製造
泉南	(A) <u>タオル</u> (B)瓦・箆司製造 (D)ネル生地 <u>マッチ箱木地</u> 白木綿 織物製造 紋羽 芭蕉糸組及糸繫ぎ 塵紙製造 木櫛製造 煉瓦製造 粘土運搬 磨き砂 石綿 紡績職工 運搬業 山稼ぎ 植木職
南河内	(A)歯刷子毛植 <u>マッチ箱張</u> (B)段通 竹簾 竹籠 妻揚子 箕作り 瓦製造 <u>洋傘柄</u> (C)貝釦 (D) <u>メリヤス製造</u> <u>マッチ木地</u> 白木綿 織物製造 組紐 再綿製造 <u>マット</u> 織 真田紐製造 苧麻繫ぎ 団扇 杉粉 輸出向提灯張 凍豆腐 玻璃玉切り 金剛砂採取 日稼業
中河内	(A)刷子毛植 <u>マッチ箱張</u> ハンモック 撚糸 タオル 業種細末 (B)針金 <u>洋傘柄</u> <u>ゴム風船</u> 胡粉 下駄表 藤細工 妻揚子 瓦・煉瓦製造 (C)貝釦 <u>金網</u> (D) <u>メリヤス</u> ガーゼ カタン糸製造 ロープ・紡絃 紙箱製造 <u>牛骨釦</u> テニスラケット <u>ゴム風船</u> 膠 白木綿 織物製造 製綿 沙織 雲斉織 襖地 鼻緒 酒搾袋縫い 砂利運搬 庭石採掘 山稼ぎ 日雇
北河内	(A)刷子毛植 <u>タオル</u> 羽織組紐製造 (B)竹籠 瓦製造 (D) <u>メリヤス</u> クレープ 木綿製造 織物製造 糸繰業 竹細工 竹筥 炮烙 干草刈り 竹箆 製茶 農具製造 山林作業 茶摘 金糸及扇子 石材採掘 日雇業 砂防工事

- (註) (1) 大阪府内務部：『府下農村に於ける副業的加工業の概況』(1929年)において、(A)は「賃仕事」、(B)は「自家企業ノ部」、(C)は(A)・(B)両者の形態があるものとしてとりあげられているものを示す。(D)はその他。
- (2) 下線を引いた副業は、輸出に依存する割合の高い工業と関連したもの。
- (3) 前図資料より作成。

している。次に周辺農村に影響を及ぼした大阪府工業の動向と大阪市工業の性格について述べることにする。

## II 明治期の大阪府工業の動向と大阪市工業の性格

### 1) 工場・職工数からみた大阪府工業の動向

大阪の工業が紡績業を中心とした近代工業へと大きく移行するのは、1881年（明治14）から1894年（明治27）ころである。これについて石塚裕道氏は、大阪近郊での在来産業展開が、明治10年代（1878～1887）以降の資本制生産発展の条件を整備していった側面に注目されているが<sup>18)</sup>、この時期はそれだけでなく、大阪市を中心にして兼業織布業、機械器具、製紙、造船、精銅、硫酸、硝酸、セメントなどの工業も出現し、中小の工業では在来の工業に代わって医薬品、メリヤス、ボタン、洋傘、ブラシ、石鹼、紙函、製革、セルロイド、ガラスなどの発達や、顔料、モスリン染色、ワイシャツ、帽子、洋傘骨、珧瑯鉄器、坩堝、毛布、ビール製造など新たな工業も成立している<sup>19)</sup>。そしてこれらの工業が逆に周辺地域の工業のあり方に影響を及ぼしていったことも見逃せない。当時、紡績、綿織物、段

通織、毛布、マッチ、煙草、製紙、ブラシなどの業種は、とくに女子労働力を多用するため、この間に工業をめぐる労働事情の変化も急であった<sup>20)</sup>。また雑貨工業に限ってみれば、マッチ、ブラシ、メリヤス、ワイシャツ、帽子、硝子、製綱、製函、紙製品、革製品などはこの30年代に海外市場の著しい拡大で、急成長をとげた業種としてあげることができる<sup>21)</sup>。

この時期、各種工業の発達は大阪市を中心にするんだことはいうまでもないが、それでは大阪市とその周辺地域とは具体的にどのような展開をみたのか表2によって検討していこう。大阪府全体では1902年から1904年にかけては965工場から1,199工場へと、実に24.2%の高い増加率を示しており、日露戦争という戦事的な事情が経済拡大の契機となって、急速に工業化を押し進めたことを物語っている。また、日露戦争後の日本経済は単に重化学工業の政府の補助・直営下における発展だけでなく、紡績業・製糸業において資本集中が一層すすみ、30年代に工場制手工業形態を展開した伝統的諸産業においても、小型発動機を導入して小規模工場制工業を展開させていくこと<sup>22)</sup>から、こうした資本制生産が急速に発展していく最中の大阪市と、そ

表2 大阪府における工場・職工数の推移とその比率（1897～1906）

西暦年	工 場 数						職 工 数						男子職工比率					
	大阪市		その他市・郡		計	比率	大阪市		その他市・郡		計(大阪府)	比率	大阪府		大阪市		その他市・郡	
	比率	%	比率	%			比率	%	比率	%			比率	%	比率	%	比率	%
1897	—	—	—	—	685	—	—	—	—	—	55,650	100.0	44.6	—	—	—	—	
1898	295	46.3	342	53.7	637	100.0	26,759	56.2	20,814	43.8	47,573	100.0	46.1	50.5	40.5	—	—	
1899	286	38.1	465	61.9	751	100.0	28,690	53.6	24,818	46.4	53,508	100.0	46.1	52.8	38.3	—	—	
1900	381	47.3	425	52.7	806	100.0	29,636	56.6	22,757	43.4	52,393	100.0	49.2	56.5	39.8	—	—	
1901	462	55.9	365	44.1	827	100.0	36,170	63.0	21,233	37.0	57,403	100.0	46.9	53.6	35.3	—	—	
1902	466	56.3	361	43.7	827	100.0	31,870	58.1	23,030	41.9	54,900	100.0	46.2	54.3	35.1	—	—	
1903	555	57.5	410	42.5	965	100.0	41,268	62.4	24,901	37.6	66,169	100.0	46.8	52.6	37.3	—	—	
1904	778	64.9	421	35.1	1,199	100.0	47,871	66.9	23,743	33.1	71,614	100.0	49.9	54.6	40.3	—	—	
1905	721	62.3	436	37.7	1,157	100.0	43,743	63.5	25,096	36.5	68,839	100.0	49.4	56.3	37.4	—	—	
1906	818	62.4	492	37.6	1,310	100.0	46,490	63.7	26,518	36.3	73,008	100.0	51.4	58.1	39.7	—	—	

(註) (1) —は該当数値なし。

(2) 工場は職工10人以上。

(資料) 『大阪府統計書』(1907年), p. 185より作成。

表3 大阪市における工場・職工数・生産額(1904年)

業種	工場数	職工数			生産額
		男子	女子	計	
繊維及染色工業					円
紡績	9	2,282	9,428	11,710	20,858,049
製綿	63	167	479	646	2,350,599
織物	56	420	2,038	2,458	5,539,010
莫大小组	169	565	687	1,252	3,851,601
組紐	15	50	143	193	238,149
毛斯倫・友禪	24	571	99	670	1,007,138
染物	171	519	19	538	3,164,982
足袋装束	210	232	465	697	937,020
洋服	97	176	29	205	432,072
合製糸	22	120	215	335	430,731
計	836(16.4%)	5,102(19.2%)	13,602(61.6%)	18,704(38.4%)	38,809,351(39.5%)
機械器具工業					
金属精錬	37	1,254	76	1,330	12,369,185
鉄製品	508	2,345	46	2,391	4,268,651
金属製品	221	1,711	634	2,345	2,167,840
船舶・船具	63	3,025	10	3,035	2,779,631
車両	48	684	1	684	707,869
計	877(17.2%)	9,019(33.9%)	767(3.5%)	9,786(20.1%)	22,193,176(22.6%)
化学工業					
硝子器	97	1,034	53	1,087	2,047,295
セメント	3	377	72	449	406,070
製薬	40	209	22	231	928,389
燐寸	27	1,339	3,037	4,376	2,185,808
製油	14	91	4	95	1,227,289
人造肥料	6	252	—	252	3,511,861
売薬	245	100	81	181	599,511
石鹼	31	171	92	263	680,306
化粧品	65	90	18	108	602,311
コークス	23	266	65	331	676,676
塗料	9	58	26	84	290,133
煉瓦及埴塙	12	151	20	171	401,661
計	572(11.2%)	4,138(15.5%)	3,490(15.8%)	7,628(15.7%)	13,557,310(13.8%)
飲食工業					
酒類	51	89	3	92	1,165,584
精米及粉類	59	229	34	263	1,478,219
菓子	306	465	48	513	2,057,189
煙草	13	279	823	1,102	1,559,597
罐詰	10	59	65	124	610,274
昆布	122	115	165	280	271,353
醬油・味噌	34	96	—	96	257,897
計	595(11.7%)	1,332(5.0%)	1,138(5.2%)	2,470(5.1%)	7,400,113(7.5%)

表3 (つづき)

業 種	工 場 数	職 工 数			生 産 額
		男 子	女 子	計	
雑 工 業		人	人	人	円
製 革	46	1,369	547	1,916	4,130,922
刷 毛	57	543	339	882	597,238
印 刷 物	155	1,282	176	1,458	2,072,195
紙 類	24	436	170	606	1,266,994
指 物	291	266	—	266	478,397
履 物	229	186	44	230	556,448
靴	48	94	4	98	847,658
卸	25	176	71	247	600,818
帽 子	37	157	150	307	430,321
洋 傘	76	210	203	413	749,108
文 具	66	206	41	247	362,361
蠟 燭	32	48	194	242	453,060
紙 製 品	121	158	307	465	435,811
玩 具	64	218	193	411	225,239
漆 器	84	99	9	108	215,886
計	1,355(26.6%)	5,448(20.4%)	2,448(11.1%)	7,896(16.2%)	13,422,461(13.6%)
そ の 他 工 業	864(16.9%)	1,593(6.0%)	621(2.8%)	2,214(4.5%)	2,993,260(3.0%)
合 計	5,099(100.0)	48,698(100.0)	26,632(100.0)	22,066(100.0)	98,375,671(100.0)

(資料) 『大阪市統計書(第5回)』(1906年)より作成。

の他の市・郡におけるそれぞれの工業数比率の推移を迫うことにした。

表3によると、1900年までは大阪市以外の市・郡の比率が大阪市のそれを上回っていたが、1901年には逆転し、1904年以降は大阪市での顕著な工業集積を認めることができる。同様の傾向を職工数についてみれば、大阪府全体では年ごとの変動が大きいものの、1903年以後の増加が目立っている。また、男女比に注目すると、1903年ころまで大きな変化はないが、1904年には両者の割合がほぼ同じとなり、1906年には男子職工比率が51.4%となってはじめて女子を上回る。大阪市についてこれをみれば、男子の職工数は女子のそれを下回ることにはなかったが、やはり1904年を契機に男子職工の割合が着実に高まってきている。一方、大阪市以外のその他の市・郡では、この10年間に大きな変化もなく、女子職工の割合が6割前後を維持している。

これより大阪市では、全般的に男子職工依存の工業構成へとすすんだ一方、その周辺地域は依然として、女子労働力に基礎をおく工業に比重のあったことを示している。

## 2) 大阪市工業の性格

大阪府工業の飛躍的な発展は、これまで述べてきたように1904年前後であった。それに主導的な役割をはたし、周辺地域にも大きな影響を及ぼしたと考えられる大阪市工業の内容を示したのが表3である。ただし、表作成に使用した『大阪市統計書』は、このころはまだ業種ごとに分類・整理されたものでなく、ここでの分類はその後の比較・検討を考慮して、大正期の同統計書の分類に従ったものである。

さて、『大阪市統計書』(1905年)によると、前年の1903年における大阪市の工業は工場総数4,283を数えている。その内訳は、その他の雑品工業が947工場(22.1%)でもっとも多く、

これに次ぐのが雑工業の830工場(19.4%)であった。以下機械器具工業の779工場(18.2%)、繊維及染色工業の686工場(16.0%)、化学工業の561工場(13.1%)、飲食工業の480工場(11.2%)の順である。1904年には工場総数が5,099とこの1年間に19.1%の増加を示すが、その多くは工場数全体の26.6%を占める雑工業の増加によるものであった。しかし生産額では繊維及染色工業が圧倒的に多い。1903年には総生産額の48.4%を占め、1904年には機械器具や雑工業、飲食工業などが伸びたことで、前年より比率が低下したとはいえ39.5%の高率で、大阪市工業の中心をなしていたことには変わりはない。そのなかでも紡績業の地位は高く、これだけで工業総生産額の21.2%を占めている。また、機械器具では金属精錬が、化学工業部門では肥料、マッチ、ガラスなどの産額が多かった。著しく伸びた雑工業では製革、印刷、紙製品などに多くの産額がみられる。

次に、職工について検討すると、男子職工のうち機械器具が全体の33.9%を占め、次いで雑工業が20.4%と多い。以下、繊維及染色19.2%、化学15.5%、雑品6.0%、飲食5.0%の順となっている。前述した大阪市における男子職工の著しい伸びは、機械器具や雑工業の顕著な発達によるものと解される。他方、女子職工では全体の61.6%が繊維及染色業に従事しており、そのなかでも紡績、織物などに多く、これに次ぐのが化学の15.8%でその大部分がマッチ製造業で占められている。このほか煙草も女子労働力を多用する業種であった。

ところで、輸出雑貨としてこの時期多くの女子労働力に依存し発達したといわれる、ブラシ製造業の場合はどうであったのだろうか。ブラシはこのころ統計のうえでは雑工業の刷毛に含まれていたと考えられるが、刷毛の製造に従事する女子職工の割合は38.4%である。この比率は雑工業のなかにあっては、表3に示していないが洋傘、帽子に次ぐもので、それほど高いとはいえない。大阪市ではこうした工業も男子職工に依存する割合がきわめて高く、その意味で

は東京における場合と同じように、大都市工業としての性格を有し存在したといえる。しかしブラシはそれと同時に、大阪市の周辺農村において、安価な農家婦女子の労働力と結びついて成立・発展していった側面をもった工業でもあった。

### Ⅲ ブラシ・貝ボタン・マッチ製造業の地域的展開

#### 1) ブラシ製造業

大阪における近代的なブラシ製造業は、1888年に松本重太郎が創設した盛業合資会社(北区下福島)にはじまる。この会社による木ブラシ、歯ブラシ生産は、木・生地<sup>23)</sup>の製作・加工から植毛まで、一貫した生産体制をとって、翌年にはすでにアメリカへ製品見本を輸出するまでに技術的な発達をみている。また、内地向けのブラシも、上町付近の町工場を中心に生産されていたが、こうした町工場も次第に輸出向け生産を指向している。そして、輸出の盛況によって量産されるブラシに、毛植が追いつかなくなり、結局、1893年に毛植部門が、前に述べたように中河内農村へ進出していく。

ところで、ブラシは一般に大規模工場における一貫大量生産では、変動の激しい海外の需要に適切に対応することが困難な場合が多く、そのため大規模量産化を指向した企業の多くは明治末期に姿を消している。会社の解散や倒産で放出された多くの工場労働者(職工)は、その後ブラシ業界で親方と称せられる小資本家に従属し、原料の支給を受けつつ分業的にブラシの加工を営むようになった。1902年ころには独立した加工業者が集合した共同工場も出現したが、これは親方と分業的生産者である職人とを結びつける必要から生まれた性格のものであった。<sup>24)</sup>

このころ、「親方は牛骨を柄とする歯刷子製造の徑路に於て甚だ複雑な交渉を持たなければならない。彼は一本の歯刷子を製造する為にも共同工場に於て柄摺、平穴、立穴、再柄摺、首摺、馬布と其各々について専業の職人と交渉を持たなければならない外、挽賣業者、割り屋、



骨晒業者、精毛業者、植毛業者、加工屋、等についてもまたこれを要す可きで」あり、こうした生産体系のなかで、ブラシの製造がなされていた。1907年（明治40）ころには牛骨や獣毛の輸入、原料の木・生地生産、挽売などにも専門者があられ、分業化がさらにすすみ、その結果このころの輸出ブラシの多くは、中小零細な町工場や共同工場の職人の生産によるものが主流を占めるようになったのである。

ところで、明治末期の大阪ブラシ業界には新たな変化がおこっている。それはセルロイド柄歯ブラシの出現である。これはこれまでのブラシ製造工程のなかで、もっとも困難とされ、多くの労力を要した毛植部門の機械化をいち早く実現しており、この点で従来の骨柄歯ブラシとは大きく異なっていた。そこで、こうした新たな動向をも含めて、ブラシ製造業が地域的にどのような展開をみたのか、図2と3をもとに考察してみた。

この図の作成には、大阪府第3部の『大阪府下会社組合工場一覧』（1906年）と、大阪府内務部の『大阪府下商工業者一覧』（1920年）を使用した。1920年の資料は、従業者3人以上の工場が対象となっているが、1906年の資料にはとくに規定はなく、内容からほとんどの工場が採録されていると思われる。ただ、この資料には明らかに誤りと考えられる記載もあって、この点については十分留意した。またブラシには骨柄歯ブラシ、セルロイド柄歯ブラシ、竹柄歯ブラシなどのほか、頭髮・服・爪ブラシや化粧ブラシ、工業用ブラシなど、種類もきわめて多いが、ここでは歯ブラシを中心に検討していくことにする。

1906年の大阪府におけるブラシの工場数は39であったが、歯ブラシはこのうち19工場を数えている。このほかに精毛工場が1、毛植が6工場であった。図2によると、19工場のうち、10工場が東区にあり、このうちの6工場が東平野町に集中する。大阪市内にはこのほか南区に2、西区に1工場が分布する。隣接の西成郡にも3工場があり、このうちの2工場は、鷺州村の関

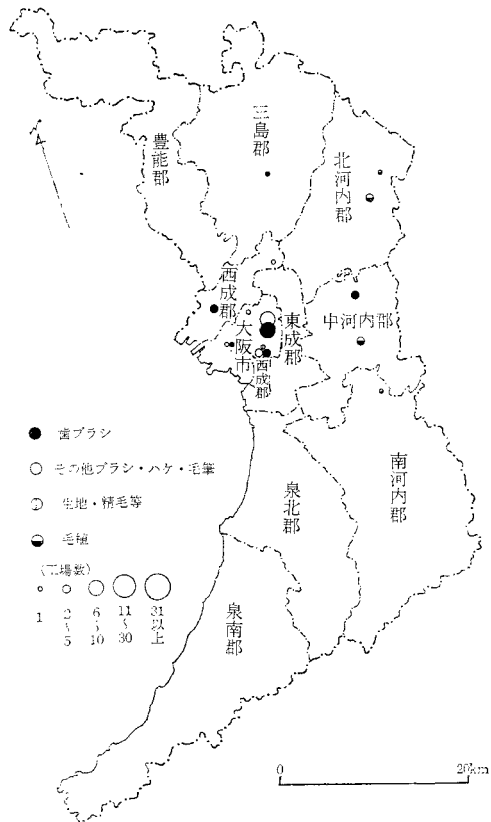


図2 大阪府におけるブラシ工場の分布  
(1906年9月)

(資料) 大阪府第3部：『大阪府下会社組合工場一覧』（1906年）より作成。

西刷子工場（1902年創業、職工数416人）と豊崎村のゼ・ローヤル刷子合資会社（1902年創業、職工数470人）で、規模の大きな工場であった。また、中河内郡英田村や三島郡茨木町にも工場が認められる。

この当時、大阪市の工場は全体的に1892年前の創業になるものが多く、職工規模も30人以下の工場が多いなかで、北区下福島の帝国ブラシ（前盛業合資会社、職工数552人）は大規模なものであった。しかし大阪市内には、毛植工場がなく、6工場は北河内に3、中河内に2、南河内に1と、すべて河内農村に立地していた。中河内の2工場は、八尾町に進出した帝国ブラ

シ八尾工場（1895年創業，職工数100人）とセ・ローヤル刷子合資会社八尾分工場（1903年創業，職工数161人）で，この両工場の職工261人のうち260人が女子であった。毛植が安価な農村婦女子を使用することで成り立っていたことをよくあらわしている。

当時のブラシ生産は，先に述べたように北区や西成郡における大規模工場での生産と，東区に集中する町工場における生産，それらの毛植をうけもつ河内農村というように，地域的に特徴をもった生産がなされていた。

ブラシ工場も1919年には大幅に増加し，その数は225工場であった。このうち歯ブラシが136工場，その他のブラシ工場が48，このほかに精毛・整理などの工場が21，木・生地<sup>26)</sup>の製造が5工場<sup>27)</sup>で，毛植工場も12に増えている。図3に示したように，歯ブラシの136工場のうち，全体の47.1%に当たる64工場が大阪市にあり，このうち東区には34工場，南区に22工場が集中している。また，注目すべきは東成郡の鶴橋町に15工場，中河内郡の三野郷村や八尾町などにもブラシ工場が分布することである。つまり，大阪市の東・南両区にブラシ生産が集中していくなかで，鶴橋や周辺の河内農村においても，新たなブラシ生産地域の形成がすすみつつあったことを示している。このことは，明治期には大阪市以外にみられなかった精毛の整理や木・生地の工場が出現していることからもうかがわれる。また，毛植工場も12に増加している。

工場の規模について述べれば，ブラシ全体では，225工場のうち，職工5人以下の工場が109を数える。これは工場総数の48.4%に当たり，職工30人以下の工場までとれば，その数は208となって全体の92.4%を占め，中小零細な工場における生産が主体をなしている。

ところで，この資料では，工場が骨柄・セルロイド柄など，どの種類の歯ブラシを生産していたのか，はっきりとした記載はない。そのため詳細な検討はできなかったが，新たにブラシ生産地域の形成をみたところは，主として明治末期から大正期に発展したセルロイド柄歯ブラ

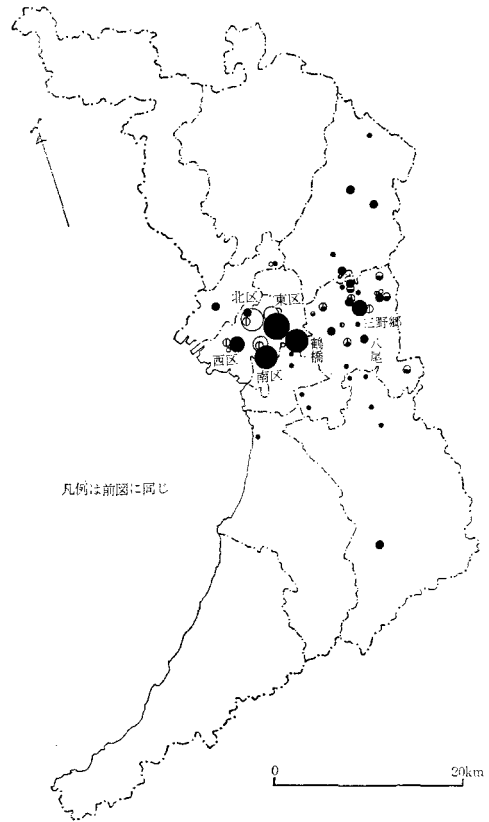


図3 大阪府におけるブラシ工場の分布  
(1919年12月)

(註) 職工3人以上。

(資料) 大阪府内務部：『大阪府下商工業者一覽』  
(1920年)より作成。

シを生産する地域であったと考えられる。<sup>26)</sup>このブラシは，従来の骨柄と比べて，「製造方法の簡易と機械工業的生産方法は，正に従来の繁雑なる刷子工業に代る可き<sup>27)</sup>」であった。それだけに，これまで大阪市内において複雑な生産組織をつくりあげ，そのもとで成り立っていた骨柄よりは，セルロイド柄の地域的な生産体系は比較的<sup>26)</sup>自由であったといえよう。そのため，都市内部に生産の場をおく必然性はそれ程強くなかったといえる。例えば，セルロイド柄歯ブラシは，型締によって柄を形成するので，ブラシ柄をつくりあげるこれまでの工程は必要でなく，

また、機械植のため、毛根を止めるための糸が通る立（縦）穴や栓詰、頭摺などの加工部門もいない。柄の材料もセルロイドのため、形質も同じで、入手も容易であった。ただ、セルロイド柄であっても、生地や毛植などの部門では、骨柄のそれを兼ねることもあり、その逆の場合もあって、両者のかかわりは全く無縁ということではなかった。さらに、毛植の機械化は、この部門が専門化していくことを比較的容易にするものであった。機械を所有することで、毛植屋と称される毛植業者となり、小規模な加工場でそれに従事するほか、はじめのころは、農家にも機械を貸与し、賃加工をさせている。セルロイド柄の毛植業者にとっても、安価な労働力の存在する周辺農村は、やはり有利な場所であり、毛植工場においては農家婦女子の賃稼ぎが広くおこなわれていた。都市の内部だけでなく、その周辺の農村にもこうした毛植屋が出現したことは、ブラシ製造地域の形成を促すものであった。

このように、ブラシは都市の工業であると同時に、もっとも重要な毛植部門を中心にして、都市周辺における工業として展開してきた側面をもっており、その過程を考えれば、両地域を結びつけるうえで、骨柄歯ブラシにあっては、都市および農村に毛植仲介業者、あるいは植毛請負業者がこの部門に介在したことは無視できない。これは、「毛植注文主より委託されし加工材料は先づ彼等の手により内職者に頒たれ、其處にて加工されたものは再びこの仲介業者の許に集められ、<sup>28)</sup> 労銀の協定、並に受授等は仲介業者が注文者を代表してその衝に當るのであるから家庭副業者の側よりは恰も問屋の如く思はれて居る」存在であった。同様にセルロイド柄歯ブラシにあっては、周辺農村における毛植屋の出現の意義は大きい。

ブラシ工業の地域的な展開は、これまで述べてきたように、輸出の拡大に対応した量産体制を指向するなかから生まれてきたものであった。図4に示すように、わが国の歯ブラシ生産は、1908年に増加をみ、その後は第一次世界大戦の

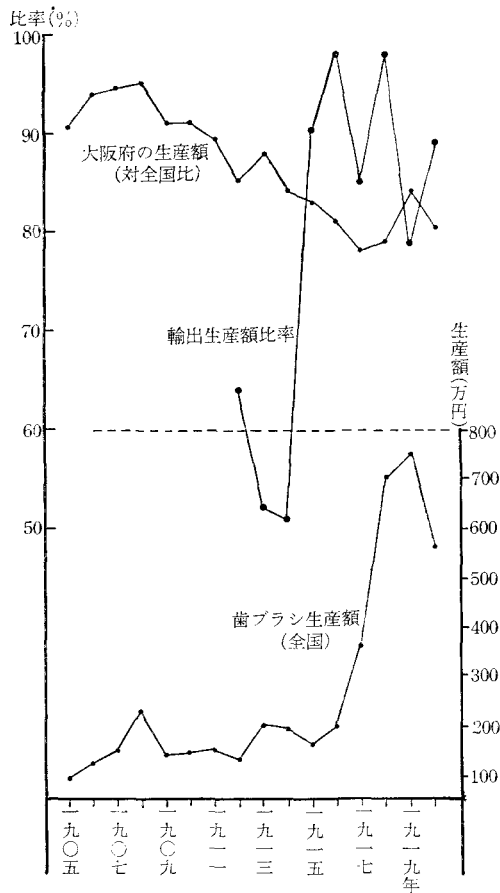


図4 歯ブラシ生産の推移（1905年～1920年）

（資料） 大阪市社会部：『刷子製造従事者の労働と生活』（1925年）より作成。

影響をうけ、1916年から輸出が著しく伸び、急激な生産の拡大をみている。1918年には全国のブラシ生産額に対する輸出の割合は98.6%にまでなっている。このときの主な輸出先は、アメリカ（47.6%）、イギリス（27.0%）、オーストラリア（6.5%）で、そのほとんどが大阪のブラシによって占められていた。<sup>29)</sup>

今日の大阪の工業について、多分に農村的・商業的・部品的で輸出が多く、量産体制をめざしているといわれる状況は、<sup>30)</sup> ブラシの場合、すでにこのころから認められる。

## 2) 貝ボタン製造業

貝ボタンは大阪市内において、1883年（明治16）ころまで真珠貝や内地ドブ貝を原料に製造され、1892年（明治25）にはすでに輸出するま

でになっている。また、1895年には裏穴ボタンの製造が、白蝶貝を使うことで始まり、製品の形成・加工の面においても技術的な発達が見られた。だがこのときは、漂白法が完成されておらず、半製品のまま輸出していた。それも1904年に化学的漂白法が、高瀬貝ボタンについて考案されたことから、輸出も完成品<sup>31)</sup>に変わり、高瀬貝ボタンの生産が急速に発展した。このことは図5・6からも明らかである。

1906年には、まだ大阪市内に9工場、南河内に5工場しか存在しなかった工場も、1919年には貝ボタンが235工場、それ以外の各種ボタンを生産する工場が41に増加している。これは先のプランと同様に、第一次世界大戦の勃発による海外需要の増加が影響したものである。この時点での具体的な生産状況については、今のと

ころわからないが、1926年当時でも、9,026,095グロスの生産量のうち、輸向数量は79.6%を占めていた。輸出先は、1922年まで主にアメリカであったが、この年に同国が関税を引き上げたことから、イギリスへの輸出が増加している<sup>32)</sup>。

貝ボタン・その他のボタン工場の創業時期は、294工場のうち203が1913年以降でもっとも多く、44工場が1908～1912年の間に創業している。つまり約8割に当たる工場が1908年以降の創業であり、この時期に工業形成が急速にすすんだことがわかる。『大阪府統計書』（1907年）によれば、1906年の大阪府における貝ボタンの生産量は、大阪市の629,386グロスに次いで、堺市が39,794グロスを産し、南河内の18,280グロスを上回っている。堺市や泉北農村の貝ボタンは、主にドブ貝を原料とした内地向ボタンの生産に

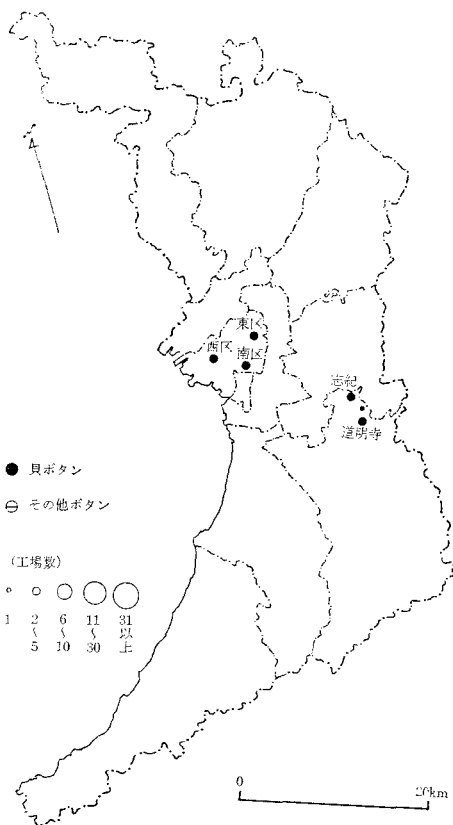


図5 大阪府における貝ボタン工場の分布  
(1906年9月)  
(註) 図2資料より作成。

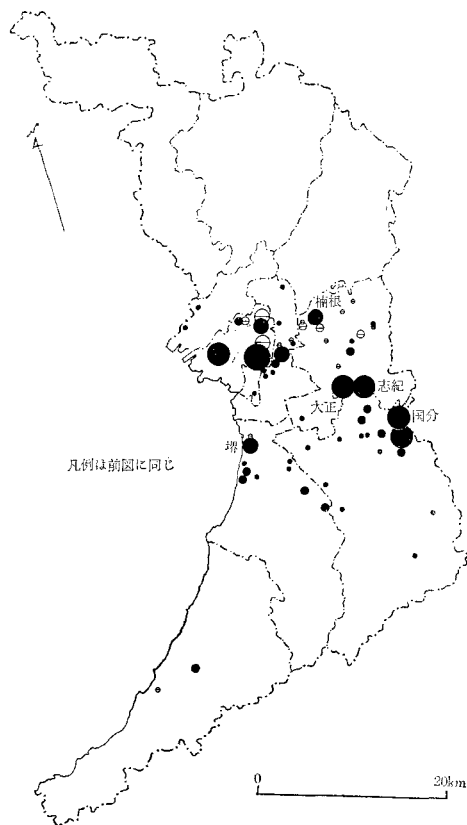


図6 大阪府における貝ボタン工場の分布  
(1919年12月)  
(註) 図3資料より作成。

重きをおくものであったと思われる。そしてこの地域のボタン生産の1つの変化は、大正期から昭和初期には、中国からドブ貝の繰生地が輸入されるようになったことで、同地域の繰生地業者の数を減じていったことである。

次に貝ボタンに限ってみると、1919年には大阪市内に111工場(43.9%)が分布し、南河内には69工場(27.3%)、中河内にも29工場(11.5%)が存在した。また、上述したように和泉の農村にも工場が分布するが、生産の中心は大阪市内にあり、その周辺農村では南・中河内に集中している。これらの工場規模は、職工5人以下が約5割で、これが10人以下の規模となれば全体の8割以上を占めることになる。

ところで、貝ボタンはどのような生産体系のもとで生産がおこなわれていたのであろうか。これを高瀬貝ボタンについて検討してみた。この生産形態は、(1)台紙付を除く全工程を同一の経営にておこなうもの、(2)繰生地を購入して、摺・挽・穿孔・仕上・撰別を同一の経営にておこなうもの、(3)自己の職場内にては仕上・撰別のみをおこなうものがあり、(2)のなかには穿孔のみは専門者に委託するものもあるが、一般に(2)と(3)の形態をとる業者が多いといわれる<sup>33)</sup>。全体的な生産体系は分業化し、繰生地仲買商、繰生地業者、黒屋、塩取屋、摺屋、賃挽屋、穿孔屋、彫刻屋、染色屋、台紙付屋などと称される業者が存在した。

これらが地域的にどう存在していたのか、河内の農村についてみると、繰生地業者は、天王寺に次いで南・中河内に多かった。この業者は繰生地仲買商や製造者に繰生地を供給し、自己の工場のほかにも下職を3~4戸もち、下職は農家の副業であった。また、南河内の柏原には賃挽屋や裏穴ボタンの穿孔屋も多く、毎日ボタン製造者を訪ね、挽場の終わったボタンを集めて穿孔するか、農家婦女子の副業にまわされていた。台紙付も専門者はいたが、これも同様に副業としておこなわれていた<sup>34)</sup>。

こうしてみると、大阪市内からの工場進出を契機に生まれた河内農村の貝ボタンは、当初の

工場生産から、分業化がすすみ、上述した部門を中心に農村労働力との結びつきがみられた。流通・販売では、大阪市内のボタン卸商や神戸の輸出商に依存しているものの、地域の生産体系は都市における場合と大差なかったと考える。なお、貝ボタンには繰生地仲買商が存在した。1916年ころに生まれ昭和初期ころで10余戸ほどあり、天王寺付近に多く居住していたといわれるが、ここは関西本線によって、南河内や中河内との結びつきの強いところであり、貝ボタン製造業の集中する地区でもあった。そして、製造業者の多くは生地の供給をこの仲買商に依存しており、この意味で都市の工業だけでなく、農村における工業においても、こうした仲買商の役割は大きかったと考える。

### 3) マッチ製造業(明治期)

わが国のマッチ製造業は、原料・労賃の高騰や中国におけるマッチ工業の隆盛などで、明治末ころに次第に凋落するとはいえ、日清戦後の鉄道・銀行・紡績と同様、産業展開のうえでは、その一時期を画するものであった。大阪では1875年(明治8)ころにおこり、はじめは中国商人の資本支配のもとで、手工的に生産されていた。そして、1897年ころから手工業の域を脱し、近代工業としての発展をとげている。技術的には軸木排列機の発明もあって、1907年前後にもっとも隆昌をみている。ここにいたるまで、低賃金のもとに多くの労働力を使役し、低価格のマッチを量産しながら、中国その他の輸出先で先進資本主義国と対抗しつつ輸出拡大を図ってきた<sup>35)</sup>。

大阪府には1906年当時、67のマッチ工場があり、このほかにマッチ箱木地が5工場、ラベル工場が2工場、軸木を生産する工場が1工場あった。地域的には、大阪市内に34工場が集中し、次いで西成郡に12、中河内に9、東成郡に5工場、そのほか堺市や南河内・泉南郡などにも分布した(表4)。全体的には、1893~1897の5年間と1903年以後の2時期に創業したものが多く、工場規模も職工101人以上の工場が約半数を占め、61~100人規模が約3割であった。

表4 大阪府におけるマッチ製造業の創業時期・職工規模別工場数（1906年9月現在）

区・町・村			工場				創業時期					職工規模					工場数計	
			マッチ	レット	軸木	木地	1887年前	1888~1892	1893~1897	1898~1902	1903~1906	不詳	10人以下	11~30人	31~60人	61~100人		101人以上
大阪市	東西南北	区	4	2			1	1	2	1	1		1	1		1	3	6
		区	7		1	3	1	2	2	3	1	2	1	3	1	2	4	11
		区	15					2	6	1	5	1			1	4	10	15
		区	8				1	1		3	3				1	3	4	8
西成郡	豊西中島	崎町村	1							1					1		1	
		島村	2							1	1					2	2	
		村	4				2			1	1				3	1	4	
		村	2								2				1	1	2	
		町	1						1							1	1	
		村	1								1				1		1	
		村	1			1				1					1		1	
東成郡	榎墨生中	本江野村	1						1					1		1		
		村	1							1					1	1		
		村	2					1		1				1	1	2		
堺市		村	1							1						1		
		村	1							1						1		
		村	1								1					1		
中河内郡	長加竜楠久意八	吉美華根寺部町	1							1						1	1	
		村	1					1							1	1		
		村	3						1	1	1		1	1		3		
		村	1						1					1		1		
		村	1						1						1	1		
		町	1						1					1		1		
南内河郡	藤古市	寺村	1				1						1			1		
		村	1		1				2				1		1	2		
泉南郡	岸和田野村	町	2						1	1			2			2		
		村	1							1			1			1		
合計			67	2	1	5	5	8	17	12	27	6	2	8	10	21	34	75

（資料）大阪府内務部：『大阪府下會社組合工場一覽』（1906年）より作成。

『大阪府統計書』（1908年）によれば、1907年の大阪府におけるマッチの生産は、87,775,200ダースで、その72.2%が輸出用の黄燐マッチで、安全マッチは27.2%と少なかった。硫黄マッチはごく僅かであった。こうしたマッチの生産は、昌盛組、大阪燐寸製造所、公益社、盛隆館など、規模の大きな製造所では工場を分散させておこ

なっていた。例えば公益社（南区、職工数566人）は、本田分工場（東区、職工数155人）、今宮分工場（南区、職工数510人）、天王寺分工場（南区、職工数293人）、難波分工場（南区、職工数342人）など大阪市内を中心に配置している。また、盛隆館（南区、職工数175人）は中河内郡の加美村に第2分工場（職工数133人）

を、同郡久宝寺村に第3分工場（職工数175人）を創設している（図7）。

マッチは近代的な大規模紡績業のように、寄宿舎を設け、地方農村からも労働力を集め、大規模大量生産の有利性を求めて1カ所に集中するような経営形態ではなく、柚木配列機による部分的動力化は生じていても、集合作業所の有利性は機械体系の生み出すほどの生産性ではない。労働力構成を低廉な主婦や幼年労働力にしている以上、こうした労働力の存在する都市内部やその周辺農村に進出することが有利となってくる。こうした点ではこの工業も、都市周辺における工業としての性格をもっていたといえようが、最初に述べた理由によって、今日の大阪周辺農村の工業を性格づけるまでには至らなかった。

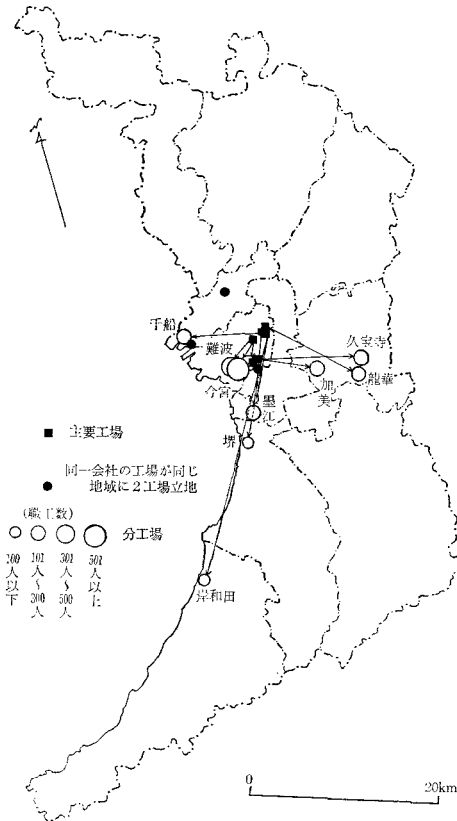


図7 マッチ製造業の主要工場・分工場の分布（1906年9月）  
 (註) 図2資料より作成。

## おわりに

今日の大阪工業は、ブラン製造業のところで述べたように、東京と比べ多分に農村的・商業的・部品的で、輸出が多く量産を指向しているといわれる。こうした特徴はブラン・貝ボタン・マッチなど代表的な輸出雑貨工業の地域的な展開を通してみた場合、大阪市周辺の農村でも明治20年代後半には芽生え、明治末期から大正期にかけて一層明確になってきたといえる。しかしそれぞれの工業のあり方は同じではなかった。

マッチの後退は明治末期に訪れたが、ブランはもっとも重要な加工部門の毛植を中心に、次第に周辺農村においても工業地域形成をおしすすめた。とくに明治末期に出現したセルロイド柄齒ブランは、従来の骨柄にみられたような地域の生産体系からは比較的自由であり、また、農村にも専業の毛植屋を生んで都市周辺農村における工業としても発達した。貝ボタンは大阪市からの工場進出が契機であったが、その後技術的な分散が生じ、それぞれの加工部門が安価な農村労働力と結びついている。周辺農村における生産体系は、都市のものとの量的・質的な差異はあったとしても、地域的な存在形態は大差なかったと考える。

大阪市内において、明治の早い時期に生成したこれらの工業は、その後市街地を中心に都市の工業として発達した。これがその周辺農村、とりわけ河内農村において存立しえた条件の1つにマッチ工業の場合も含めて、綿作・綿業衰退後の安価な農村労働力の存在があった。また、ブラン・貝ボタンの生産体系でみた毛植仲介業者や繰生地仲買商など、きわめて商人的業者の介在は、工業を介した都市と農村の関係を考える場合には無視できない。これを大阪的な一側面とみればみれなくもなからう。以上からここで述べたブラン・貝ボタン・マッチなどは、当時都市の工業であると同時に都市周辺の農村における工業であったともいえよう。

(熊本大学教養部)

〔注・参考文献〕

- 1) 服部一馬「明治十年前後の日本産業—日本産業近代化の起点」（地方史研究協議会編『日本産業史大系I（総論篇）』東京大学出版会，1961），348～365頁。
- 2) 井出策夫「大都市零細産業集団の内部構造」地理評46—10，1973，668～674頁。
- 3) 板倉勝高・井出策夫・竹内淳彦・高橋潤二郎「阪神の工業—京浜との対比において—」人文地理20—1，1968，1～32頁。
- 4) 山中進「明治・大正期の農家副業からみた八尾地域の変容」人文地理29—6，1977，1～27頁。
- 5) 黒正巖「明治初期の工業—特に大阪を中心として—」（『明治維新経済史研究』改造社，1930），667～701頁。
- 6) 石塚裕道「大阪・東京における産業発展の特質」人文学報（東京都立大学）89，1972，159～191頁。
- 7) 堀江保蔵「明治・大正年間の大阪の工業（上）・（中）・（下）」明治大正大阪市史紀要41・42・43，1932。
- 8) 宮本又次「江戸期より明治期に至る大阪経済と工業の発展概観」（『大阪の研究(2)』清文堂出版，1968），358～376頁。
- 9) 中島茂「大正中期における大阪府の工業構成—『大正十年十一月工場通覧』の分析—」岡山大学地理学研究報告（都市と農村）3—1，1977，81～97頁。
- 10) 別枝篤彦「大阪市における工業の分布論的研究」地理論叢第4輯，1934，175～218頁。
- 11) 大阪府内務部『府下農村に於ける副業的加工業の概況』1929，143～149頁。
- 12) 大阪府立商工経済研究所『最近10年間における大阪中小工業の基本動向—その5，眼鏡レンズ製造業—』1969，5～6頁。
- 13) 大阪府内務部『農家副業成績品展覧会報告』1915，90～93頁。
- 14) 山中進「泉北農村の地域的特質と段通業地域の形成—明治期～昭和初期—」熊本大学教養部紀要（人文・社会科学編）18，1983，21～37頁。
- 15) 八尾市商工課『八尾ブラシ工業の実態』1958，191頁。
- 16) 柏原市『柏原市史（第3巻，本編II）』1972，258～263頁。
- 17) 山中進「大阪における近代工業の発展と八尾地域の変容」立正大学文学部論叢59，1977，99～126頁。
- 18) 前掲6)
- 19) 大阪府立商工経済研究所『発展過程よりみたる大阪工業とその構造』1952，32頁。
- 20) 前掲19)，27頁。
- 21) 前掲19)，43頁。
- 22) 古島敏雄『産業史III』山川出版社，1966，494頁。
- 23) 竹内達『日本ブラシ業界史』日本ブラシ新報社，1968，28頁。
- 24) 大阪市社会部『刷子製造従業者の労働と生活』1925，40～41頁。
- 25) 前掲24)，46頁。
- 26) 前掲17)
- 27) 前掲24)，37頁。
- 28) 前掲24)，55頁。
- 29) 前掲24)，24～25頁。
- 30) 前掲3)
- 31) 大阪市役所産業部『大阪の鈕釦工業』1930，2～6頁。
- 32) 前掲31)，103～104頁。
- 33) 前掲31)，88～89頁。
- 34) 前掲31)，89～92頁。
- 35) 前掲31)，89頁。
- 36) 武知京三「明治後期在阪燐寸製造工業経営の展開」（大阪歴史学会編『近代大阪の歴史的展開』吉川弘文館，1976），141～210頁。
- 37) 前掲7)
- 38) 前掲8)
- 39) 北崎豊二「明治期におけるマッチ製造業の発展—阪神地方を中心として—」ヒストリア26，1960，18～33頁。
- 40) 前掲22)，483～484頁。



The Formation of the Industrial Area in Osaka City and in the Adjacent Rural Areas, with the Development of the Export-oriented Small-scale Industries during 1887-1926

Susumu YAMANAKA

The author's intention is to study the formation process of industrial areas in Osaka City and the areas surrounding it, subsequent to the industrial revolution of Japan, with special regard to the development of small-scale industries.

The industrial revolution is considered to have taken place about twenty years after the Meiji Restoration (1868) in big cities such as Tokyo, Osaka and Nagoya, where modern industries were established and showed a remarkable development. As a consequence, the areas surrounding these cities experienced rapid and remarkable changes in many aspects. Osaka City and its environments constituted a typical example of areas undergoing an evolution of this kind. This paper points out a specific example from the situation in Osaka in which modern industries such as the production of brushes, shell buttons and matches were moved out of Osaka city. This was done in order to absorb surplus labour forces in the Kawachi rural area resulting from the decline of the cotton cultivation and cotton industries, which had lasted from the late Tokugawa period into the 1890's.

The brush, shell button and match industries initially developed in Osaka city in the late 1880's. From 1907 to 1926, they showed remarkable development by reason of the increase in the export trade not only in Osaka city but in the surrounding areas of the city, especially the Kawachi rural area, which lies in the eastern suburb of Osaka city. Thus, the reasons for the development of urban industries in rural areas in the vicinity of Osaka city may be summed up as follows :

I) The decline of the cotton cultivation and cotton industries resulting in a large amount of cheap labour in the Kawachi rural area.

II) The existence of a number of wholesalers or middlemen, who collected miscellaneous products and supplied raw materials. Working both in and out of the city, they served to connect the urban industries to the brush and shell button industries in rural areas.

In this way, unlike the Tokyo metropolitan area, where small-scale industries were distributed in the built-up areas, forming an essential part of the industries in this big city, the small-scale industries producing miscellaneous goods in Osaka were marked by their widespread expansion into the surrounding rural areas.